

津田真澄 著

人事労務管理の思想



 有斐閣新書

人事勞務管理の思想

津田眞澄 著

はしがき

本書は、経営体における人事労務管理がどのように発想されてきたかについて、その思想の発展に沿いながら跡づけたものであり、それぞれの歴史的画期に新しく登場した代表的理論の内容と性格を読者に伝えようとするものである。

人事労務管理は、すべての人間がその基本的な権利と義務において平等である近代市民社会において、経営体に参加する人々を経営組織の中でどのように位置づけ、どのように活動させるかということを課題として成立してきたのであるから、人事労務管理の思想の発展史は近代社会における最も具体的な社会思想史の一つだということができよう。

本書では、人事労務管理の思想がなにを追求してきたかについて一貫した筋道を読者に提供したいと考えた。そのために、各章の最初の節でその章の主題を理解するための要点を説明した。それゆえに、各章の最初の節だけを通読すれば、本書がどのような構成で書かれているかということが理解できるようになっている。ただし、第5章では、代表的学説ではなく、ヨーロッパにおける経営参加制度の展開の歴史を考えてみる構成になっている。しかしながら、その場合にも、経営参加の制度の詳細な説明ではなく、その制度がどのような思想で成立しているのかということに重点をおく叙述になっている。

終章では、日本の経営体の組織と管理の特質を検討し、その中で的人事労務管理がどのような性格をもっているかについて述べている。その目的は、いわゆる「日本の経営」が一体どの面で欧米的経営と似ており、どの面で特質をもつかということを読者に伝えることにある。そのために、欧米的経営の特質を復習しながら、私自身が「日本の経営」の特質のもとでの人事労務管理をどのようにとらえようとしているかについて述べて読者に問題を提起しようとした。

人事労務管理について一層具体的な研究をしようとする読者には、東京都立大学白木他石教授と私が編集した『人事・労務管理の基礎知識』（有斐閣、昭和五一年）を推薦しておきたい。この書は現在の第一線の学者および実務家の執筆によるものであって、親切な参考書として役立つのではないかと考えている。

本書の素材となったのは、『日本の経営の論理』（中央経済社、昭和五二年）を書くために、数年前から少しずつ進めてきた理論的学習のノートである。このノートの一部を官業労働研究所『官公労働』に昭和五〇年二月号から昭和五一年五月号まで連載していたものが有斐閣編集部の三倉三夫氏らの眼にとまり、本書の刊行となった次第である。刊行にあたっては同編集部の米井繁子さんにお世話になった。記して謝意を表したい。

昭和五二年九月

第1章 近代的管理思想の成立…………… 7

第1節 本章の理解のために…………… 2

▼近代的企業の成立(2) ▼イギリス企業の労務施策(3) ▼本章の紹介(5)

第2節 マックス・ウェーバーの官僚制理論…………… 8

▼ウェーバーの生涯(8) ▼ウェーバーの官僚制理論(12) ▼合理性の組織と管理(15) ▼官僚制理論の問題(19)

第3節 アンリ・ファヨルの管理原則論…………… 22

▼ファヨルの生涯(22) ▼産業および一般の管理(26) ▼ファヨルの理論への評価(32)

第4節 フレデリック・W・テイラーの科学的管理法…………… 35

▼テイラーの生涯(35) ▼科学的管理法(41) ▼科学的管理法と精神革命(45) ▼テイラーの業績の評価(47)

第5節

ヘンリー・フォードの大量生産管理

49

- ▼フォードの人物像(49)
- ▼生いたち(53)
- ▼自動車の開発と企業化(54)
- ▼晩年の変化(56)
- ▼流れ作業組立方式創始の虚名(58)
- ▼体系的管理の完成者の虚名(59)

第2章 人事管理思想の展開

63

第1節

本章の理解のために

64

- ▼近代的管理から人事管理へ(64)
- ▼人事管理から集団的管理へ(66)

第2節

ウォルター・D・スコットの人事管理論

68

- ▼スコットの生涯(68)
- ▼スコットの人事管理論(71)
- ▼スコットの理論の問題点(75)

第3節

オールドウェイ・ティードの人事管理論

78

- ▼ティードの経歴(78)
- ▼ティードの人事管理論の位置(78)
- ▼ティードの人事管理論(80)
- ▼ティードの理論の問題点(83)

第4節

ジョージ・E・メイヨの人間関係論

86

- ▼メイヨの生涯(86)
- ▼ホーソン実験(90)
- ▼人間関係論(94)

第3章 現代的管理思想の形成

117

第1節

本章の理解のために

118

- ▼世界恐慌の出現(118)
- ▼現代的管理への転換(119)
- ▼本章の編成(120)

第2節

ジェイムス・バーナムの経営者革命論

122

- ▼バーナムの経歴と著作(122)
- ▼バーナムの『経営者革命』の位置(122)
- ▼経営者革命論(126)
- ▼バーナムの理論の問題点(129)

第3節

ジョン・T・ダンロップの労使関係制度論

133

- ▼ダンロップの経歴(133)
- ▼労使関係制度とその構成(135)
- ▼労使関係制度の類型論(137)
- ▼ダンロップの理論の意義(141)

第4節 チェスター・I・バーナードの協働理論

144

▼バーナードの生涯と仕事⁽¹⁴⁴⁾

▼バ

ーナードの管理論⁽¹⁴⁸⁾ ▼バーナード理論の理解のために⁽¹⁵¹⁾

第4章 行動科学的思想の開花

155

第1節 本章の理解のために

156

▼新しい発想のもとで⁽¹⁵⁶⁾▼行動科学の登場⁽¹⁵⁷⁾

▼本章の紹介

⁽¹⁵⁸⁾

第2節

アブラハム・H・マズローと自己実現の理論

160

▼マズローの生涯⁽¹⁶⁰⁾▼マズローの自己実現の概念⁽¹⁶²⁾

▼欲求

階層の理論⁽¹⁶⁵⁾▼マズローの理論について⁽¹⁶⁸⁾

第3節

ダグラス・マクレガーのY理論

170

▼マクレガーの生涯⁽¹⁷⁰⁾▼マクレガーの経営理論⁽¹⁷²⁾

▼マクレ

ガーのY理論⁽¹⁷⁵⁾▼状況的リーダーシップ論⁽¹⁷⁸⁾

第4節

タリス・アージリスの人と組織の理論

180

▼アージリスの経歴⁽¹⁸⁰⁾▼アージリスの人間理論⁽¹⁸²⁾

▼アージ

リスの組織理論⁽¹⁸⁵⁾

第5節

フレデリック・ハーズバーグの職務充実理論

189

▼ハーズバーグの研究⁽¹⁸⁹⁾▼動機づけ・衛生要因の理論⁽¹⁹³⁾▼ハーズバーグ理論の実践⁽¹⁹⁷⁾

第5章 経営参加思想の発展

201

第1節

本章の理解のために

202

▼産業民主主義と参加思想⁽²⁰²⁾▼経営参加思想の条件⁽²⁰⁴⁾

▼本

章の構成⁽²⁰⁶⁾

第2節

西ドイツの経営参加の進展

208

▼経営参加の思想⁽²⁰⁸⁾▼経営参加制度の構造⁽²¹³⁾

▼資本所有へ

の参加⁽²¹⁷⁾

第3節

スウェーデンの共同決定制度

219

▼スウェーデンの労使関係制度⁽²¹⁹⁾▼経営参加の発展⁽²²¹⁾

▼資

本の労使共有制の構想⁽²²⁵⁾

第4節

ノルウェーの職場参加の展開

227

終章 日本的経営の人事労務管理思想

▼ノルウェーの労使関係制度(227)

▼経営参加制度の体系的展開(230)

▼職場における参加計画(231)

235

▼日本の経営論の形成(236)

▼西欧的経営とはなにか(238)

▼西欧

的経営における人事管理(240)

▼日本の経営とはなにか(243)

▼日

本的経営の人事労務管理思想(245)

● 著者紹介

つだ まさみ
津田 眞 澄

1927年生まれ。東京大学経済学部卒業。

現 在 一橋大学社会学部教授。経済学博士。

専 攻 労使関係および人事労務管理

主要著書 『アメリカ労働組合の構造』日本評論社、1967年。

『年功的労使関係論』ミネルヴァ書房、1968年。

『日本的経営の擁護』東洋経済新報社、1976年。

『日本的経営の論理』中央経済社、1977年。



有斐閣新書

人事労務管理の思想

1977年10月10日 初版第1刷印刷

1977年10月20日 初版第1刷発行 ©

著 者 津 田 眞 澄

発 行 者 江 草 忠 允

発行所 株式会社 有 斐 閣

〒101 東京都千代田区神田神保町 2-17

電話 (03) 264-1311 振替 東京 6-370

京都支店 (606) 左京区田中門前町44

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

理想社印刷・明泉堂製本

★定価はカバーに表示してあります